琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

アトリエ琉游舎だより 65号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3
2019年11月6日発行

はらぺこあおむし

- 60代から下の世代のお母さんやお子さんは「はらぺこあおむし」の絵本はなじみが深いものだと思います。私も20数年前には子供に何度か読み聞かせた記憶があります。
- 1969年にアメリカ人エリック・カールによって書かれた「The Very Hungry Caterpillar」は1976年に「はらぺこあおむし」の題で日本で翻訳され幼児必読の絵本となりました。
- 日曜日に生まれた青虫は月曜にリンゴ、火曜には梨、旺盛に色々なものを食べて成長し、土曜には食べ過ぎてお腹を壊してしまいますが、やがてさなぎから美しい蝶へと変身していきます。確か絵本には青虫が食べたところに穴が開いていく仕掛けがありました。
- 琉游舎の「はらぺこあおむし」たちは食べ過ぎにもならず、好き嫌いもなく食欲旺盛です。白菜、大根、小松菜、ブロッコリーの葉っぱが一時丸坊主になりかけたのです。
- それでも何とか人の食べる分を残して、一時の旺盛な食欲も収まったようです。丸まった白菜をかき分け4匹ほどピンセットでつまみ出しましたが、あとは何処に行ったのでしょう。塩漬けの白菜の中からこんにちはと顔を出すか、茹でたブロッコリーからぷかりと浮かび上がるか不安です。それならばさっさと農薬を撒けばいいとも思うのですが、、、
- まだ葉っぱが小さな時に一回だけ消毒薬を撒きました。でもその効果はあっという間になくなり、またおいしい葉っぱを求めて「はらぺこあおむし」たちがやってきました。ならば市販のきれいな野菜はどれだけの農薬を撒いているのでしょうか。だから私は完全自給自足ができない限り、無農薬にこだわることはナンセンスだと考えます。それより青虫やバッタたちと一つの食べ物を仲良く分け合うことにしませんか？これこそ共棲ですね。
- 食べ物を私と分け合った生きものたちは無事成長しているでしょうか？せめて「はらぺこあおむし」たちはあの威圧的な蛾ではなく美しい蝶に変身して欲しいものです。と言うそばから今日も「はらぺこあおむし」が私の畑に「共棲」の矛盾と欺瞞を突き付けてきます。

詩話会
11月9日(土)
13時半から

居酒屋の会
11月25日(月)
16時から

写経会
12月1日(日)
13時半から

映画会
毎週木曜日
13時半から

読書会 13時半から
11月12日(火)
11月26日(火)
「歎異抄」を２段ずつゆっくり読んでいます。テキストもあります。途中からの参加もＯＫです。

11/14	13時半	ガス燈（113分）	イングリッド・バークマン主演、知り合った音楽家と恋に落ち、幸せな結婚生活を思い
木			描いていた主人公。しかし次第に彼女は精神を冒されて、、、究極のサスペンス映画。
11/21	13時半	ヒズ・ガール・フライデー(92分)	ハワード・ホークス監督。女性記者と編集者の恋を描くラブコメディー。新聞業界の裏側を
木			コミカルに描いた爆笑間違いなしの傑作。
11/28	13時半	チャンプ(86分)	ウオレス・ビアリー主演。かつてはボクシングの王者だったが今は落ちぶれたただの中年男。
木			息子は男を「チャンプ」と呼んで慕っていた。父は息子のためにチャンプを目指すことに。
12/5	13時半	愛のアルバム(119分)	ケリーグラント主演。出会い、別れ、喜び、哀しみ、全てを一緒に歩んできたレコードは
木			夫婦にとってはメロディーを奏でる「愛のアルバム」、涙なしでは見られないラブロマンス。
12/12	13時半	シェーン(118分)	西部劇の傑作。美しい自然描写、とリアリズムの中に定石の勧善懲悪の要素をふんだんに
木			おりこんだ名作。敏腕ガンマン、シェーンの切ないストーリー。

狂言綺語…涅槃像(生死不二)

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

先日縁あって伺った真岡の真宗髙田派本寺専修寺で「涅槃像」の仏像に出会いました。涅槃像はお釈迦様の入滅の時の姿を表現したもので、寝釈迦、ねぼとけとも呼ばれ、右手を枕として頭は北向き、顔は西向きで横たわれている姿です。かつてタイの寺院で強大な金色に輝く涅槃像に出会ったことはありますが、日本ではまだ寡聞にして拝見したことがありませんでした。この専修寺の涅槃像は元禄時代に作られたもので、木造金箔塗りの3メートルにも及ぶ大きなものです。眼をつぶられているので、最後の説法を終えすでに入滅された姿を表現されたものでしょう。穏やかなお顔です。お釈迦様は入滅されたその時から私達の中で永遠のいのちとして生き続け、教えが受け継がれてきました。専修寺の涅槃像はまさしくその瞬間を表しているのです。観光地でもなく、大寺院でもなく、参拝に訪れる方もほとんど見受けられないこの専修寺は、親鸞聖人が建立された唯一の寺院であり七年の間聖人が居住され専修念仏の根本道場とされた聖地です。重要文化財に指定されているそのほかの像や建物にもまして、私はこの涅槃像に、ここで800年近くもの間ひっそりと誇るでもなく教えを守り続けてきた信徒たちの、信仰の喜びと自負を見ることができました。

先日私の善知識が亡くなられました。この欄で二回ほど注1彼が私の善知識であることのお話をしました。直前まで好きなものをおいしく頂き、一時の歩行困難からも回復していたのですが、痛みがひどくなり救急車で緊急入院されました。21時まで看護師さんと話されていたとのことですが様態が急変して22時に亡くなられました。今年の2月以来私の行いを一緒に歩んでくれた彼は私の永遠のいのちの一人となったのです。

原始仏典はお釈迦様がそのときどきに語られた言葉が集められています。ただ断片的な言葉の集成のため、系統だった生涯や理論としての教えは明確には捉えかねるところがあります。ところが死とその前後の出来事については詠嘆と哀しみを込めて、かなり詳細に「小乗涅槃経（大パリニッツバーナ経）」注2に記されています。弟子たちにとってお釈迦様の死は永久に忘れられぬ一大事だったのであり、以後の弟子たちの行いの歩みにも決定的な影響を与えたのでしょう。死はお釈迦様にとっては突然の出来ごとでもなく、死に支配されることでもありませんでした。主体的に死を自ら受け入れ死を制圧した結果なのです。これは自分のなし得ることをなしたもの、死を明らかにしたものに訪れる心境なのでしょう。死の直前まで弟子たちを励ましています。「私はあなた方を捨ててゆかねばならない。私が自己に帰依することを成し遂げたように、あなたたちも勤め励み、心を静め、保ち、教えの通り行いなさい、そうすれば輪廻から離れて、苦しみも消滅するであろう」と。そして最後の言葉は「全てのものは移りゆく、怠らず行いを完成させなさい」です。この言葉を残された時から、私たちお釈迦様の弟子たちは行いを完成させるために止めることなく日々の歩みを続けているのでしょう。お釈迦様は自らの死、つまり「人は死すべき存在」であることを示すことで、私たちに日々の生の在り方を教えてくださったのです。

お釈迦様はこのように自らの死を通して、人は死への存在であり人生は流転する無常のものであることを解き明かしました。そしてそこに立ちすくんではなりません、死に目を背けることなくありのままに「死」を観なさいと教えています。ありのままに観ることによって「生」に対する執着を断ち切り「苦」から解き放たれるのだと言われているのです。お釈迦様は肉体的な死によって「苦」から解放されることが出来るとは決して言っていません。人は死すべき存在であることを明らかにし受け入れることで「苦」から解放されるのだと言っているのです。だから自らの死にあたっても弟子たちを励まし「自らの明かり（自灯明）と教えの明かり（法灯明）を頼りに歩まれよ」とおっしゃっているのです。

「生死不二」という言葉を私はこの「狂言綺語」の場で何度も使ってきました。この言葉は「生に執着することもなく、死を否定することもなく、生死のこだわりに翻弄されることもなく日々歩んでいきなさい」と言う教えです。「人は死すべきものとしてのみ生を与えられた存在」ということを明らかにし、そのことに帰依することが悟りであり、安らぎの処であり、涅槃であるということです。

人はよく亡き骸をみて「安らかなお顔でまるで眠られているようですね」と言います。それは眠っているからではありません。お釈迦様は肉体的な死の前と後のお顔に変化があったでしょうか。説法されるときも死を迎えて横たわっている時もどちらも安らかな顔をしていたはずです。そして私たちがいろいろな場で拝見するお釈迦様のお顔もいつも安らかなお顔のままです。先日亡くなられた私の善知識も安らかなお顔のままで亡くなられました。彼が「人は死すべきもの」と明らかにされた時以来、いつお会いしても安らかで穏やかなお姿と心は今も変わりません。彼の涅槃像のように横たわる姿の前で私が読経するときも、骨となった骨壺の前で読経するときも、変わらぬ安らかなお顔のままにこの「生死不二」の場に現前されるのです。

さて今鏡に映される私の顔は安らかでしょうか。僧侶は「生死不二」を現前させることで初めて僧侶となる注3と言った限り、私は安らかな顔で涅槃像のように横たわるその時まで「生死不二」を日々の行いの中で問い続けなければなりません。その問いの一つが、近しい人の死に直面し残された人の感情を「生死不二」の言葉に収斂させてしまっていいのかということ。言葉で断ち切れるほど感情はもろくないはずです。感情が「生死不二」と一体化し言葉にする必要がなくなる時が必ずあるはず。その時はどんな時なのか、楽しみな琉游舎の日々です。（出琉）

琉游舎：戸井　出琉・恭子
お問い合わせ先：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319－17コリーナ矢板Ｃ－８５０

注1：琉游舎だより61、62号、注2：「ブッタ最後の旅」岩波文庫、注3：琉游舎だより63号